

日蓮大聖人御書全集

しょうにんごなんじ

聖人御難事

新版
1618
ゝ
1621

しようにんごなんじ

聖人御難事

こうあん ねん がつ にち さい もんかいちどう

弘安2年('79) 10月1日 58歳 門下一同

い けんちようごねんたいさいみずのとうししがつにじゅうはちにち あわのくに

去ぬる建長五年太歳癸丑四月二十八日に、安房国

ながさのこおり うち とうじようのごう いま こおり てんしやうだいじん み 廚

長狭郡の内、東条郷、今は郡なり。天照太神の御くりや、

うだいしようけ た はじ たま もほんだいに いま にほん

右大將家の立て始め給いし日本第二のみくりや、今は日本

だいいち こおり うち せいちやうじ もう てら しよぶつぼう じぶつどう

第一なり。この郡の内、清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂

なんめん うまのとき ほうもんもう いま

の南面にして、午時にこの法門申しはじめて、今に

にじゅうしちねん こうあんにねんたいさいいつちのとう ほとけ しじゅうよねん

二十七年、弘安二年太歳己卯なり。仏は四十余年、

てんだいだいし さんじゅうよねん でんぎやうだいし にじゅうよねん しゆつせ ほんかい

天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年に出世の本懷を

と たも

なか だいなんもう

さきざき もう

遂げ給う。その中の大難申すばかりなし。先々に申すがご

よ にじゅうしちねん

あいだ だいなん

おのおの

知

とし。余は二十七年なり。その間の大難は、各々かつしろ

しめせり。

ほけきよう

い

きよう

によらい

げん

いま

法華經に云わく「しかもこの経は、如来の現に在すすら

おんしつおお

めつど

のち

うんぬん

しやかによらい

なお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」云々。釈迦如来の

だいなん

数

知

うち

うま

むぎ

くじゅうにち

こゆび

大難はかずをしらず。その中、馬の麦をもつて九十日、小指

すいぶつしんけつ

たいせき

いただき

ぜんしようび

くとう

はちにん

の出仏身血、大石の頂にかかりし、善星比丘等の八人が

み ほとけ

みでし

こころ

げどう

伴

ちゅうやじゅうにとき

ほとけ

身は仏の御弟子、心は外道にともないて昼夜十二時に仏

ひま

狙

むりよう

しやくし

はる

りおう

ころ

むりよう

の短をねらいし、無量の釈子の波琉璃王に殺されし、無量の

でしとう

酔 ぞう

踏

あじやせおう

だいなん

とう

弟子等がえい象にふまれし、阿闍世王の大難をなせし等、

によらいげんざい

しょうなん

きようめつどご

だいなん

これらは「如来現在」の小難なり。「況滅度後」の大難は、

りゆうじゆ

てんじん

てんだい

でんぎよう

あ

たま

ほけきよう

ぎようじや

竜樹・天親・天台・伝教いまだ値い給わず。法華經の行者

ぎようじや

ならずといわば、いかでか行者にておわせざるべき。また

ぎようじや

ほとけ

み

ち

零

行者といわんとすれば、仏のごとく身より血をあやされ

ほとけ

す

だいなん

きようもん 虚

ず。いかにいわんや、仏に過ぎたる大難なし。經文むな

ぶつせつ

だいこもう

しきがごとし。仏説すでに大虚妄となりぬ。

にちれん

にじゅうしちねん

あいだ

こうちようがんねんかのとりごがつ

しかるに、日蓮、二十七年が間、弘長元年辛酉五月

じゆうににち

いずのくに

るざい

ぶんえいがんねんきのえねじゆういちがつじゆういちにち

十二日には伊豆国へ流罪、文永元年甲子十一月十一日、

こうべ 傷 被 ひだり て う 折 どうぶんえいはちねん

頭にきずをかぼり、左の手を打ちおらる。同文永八年

かのとひつじくがつじゅうににち さどのくに はいる くび ぎ のぞ

辛未九月十二日、佐渡国へ配流、また頭の座に望む。そ

ほか でし ころ き お い 過 料 とう

の外に弟子を殺され、切られ、追い出だされ、かりよう等

数 知 ほとけ だいなん およ すぐ し

かずをしらず。仏の大難には及ぶか勝れたるか、それは知

らず。

りゅうじゅ てんじん てんだい だんぎよう よ かた なら にちれんまつぼう

竜樹・天親・天台・伝教は余に肩を並べがたし。日蓮末法

い ほとけ だいもうご ひと たほう じつぼう しょうぶつ だいこもう

に出でずば、仏は大妄語の人、多宝・十方の諸仏は大虚妄

しょうみよう ほとけ めつごにせんにひやくさんじゅうよねん あいだ いちえんぶだい

の証明なり。仏の滅後二千二百三十余年が間、一閻浮提

うち ほとけ みこと たす ひと にちれんひとり

の内に仏の御言を助けたる人、ただ日蓮一人なり。

かこ げんざい まつぼう ほけきよう ぎようじゃ きようせん おうしん ばんみん
過去・現在の末法の法華經の行者を輕賤する王臣・万民、

はじめは事なきようにて、終にほろびざるは候わず。

はじ
ことに
にちれん

日蓮またかくのごとし。始めはしるしなきようなれども、

はじ

驗

いま にじゅうしちねん あいだ ほけきようしゅご ぼんしやく にちがつ してんとう

今、二十七年が間、法華經守護の梵釈・日月・四天等、

しゅご

ぶつぜん

おんちか

虚

むけんだいじよう

お

さのみ守護せずば、仏前の御誓いむなしくて無間大城に墮

恐

おも

いま

おのおの 励

つべしとおそろしく想うあいだ、今は各々はげむらん。

おたのちかまさ

ながさきじろうひようえのじようときつな

だいしんぼう らくばとう

大田親昌・長崎次郎兵衛尉時綱・大進房が落馬等は、

ほけきよう

ばち

顛

ばち

そうばち

べつばち

けんばち

みようばち

法華經の罰のあらわるるか。罰は総罰・別罰・顛罰・冥罰、

よつ

そうろう

にほんこく

だいえきびよう

だい

飢

渴

同士

打

たこく

四つ候。日本国の大疫病と大けかちとどしうちと他国よ

責

そう 罰

疫 病

みようばち

おおた

りせめらるるは総ばちなり。やくびようは冥罰なり。大田

とう げんばち

べつ

等は現罰なり、別ばちなり。

おのおの

ししおう

こころ

と

い

ひと

各々、師子王の心を取り出だして、いかに人おどすとも

ししおう

ひやくじゅう

しし

こ

おずることなかれ。師子王は百獣におじず。師子の子、

かれ

やかん

にちれん

いちもん

またかくのごとし。彼らは野干のほうるなり。日蓮が一門は

しし ほう

師子の吼うるなり。

こさいみようじどの

にちれん

許

との

ゆる

とが

故最明寺殿の日蓮をゆるししと、この殿の許ししは、禍な

ひと

讒

言

し

ゆる

いま

かりけるを人のざんげんと知って許ししなり。今はいかに

ひともう

き

解

ひと

もち

たも

人申すとも、聞きほどこかずしては人のざんげんは用い給う

だいきじん

付

ひと

にちれん

べからず。たとい大鬼神のつける人なりとも、日蓮をば

ぼんしやく

にちがつ

してんとう

てんしやうだいじん

はちまん

しゆご

たも

梵釈・日月・四天等、天照太神・八幡の守護し給うゆえ

罰

難

ぞん

たも

に、ばつしがたかるべしと存じ給うべし。

つきづきひび

強

たま

弛

こころ

ま

月々日々につより給え。すこしもたゆむ心あらば、魔

便

得

われ

ぼんぷ

拙

きようろん

あ

たよりをうべし。我ら凡夫のつたなさは、経論に有ること

とお

恐

こころ

と遠きことはおそるる心なし。

いちじよう

へい

じよう

怒

いちもん

一定として、平らも城らもいかりて、この一門を

散々

しゆつたい

まなこ

塞

かんねん

さんざんとなすことも出来せば、眼をひさいで観念せよ。

とうじ

ひとびと

筑

紫

指

行

ひと

当時の人々のつくしへかさされんずらん。またゆく人、ま

たかしこに向かえる人々を我が身にひきあてよ。当時まで

いちもん

歎

かれ

現

は、この一門にこのなげきなし。彼らはげんはかくのごと

ころ

じごく

われ

げん

だいなん

し。殺さればまた地獄へゆくべし。我ら、現にはこの大難に

あ

ごしよう

ほとけ

成

きゆうじ

値うとも、後生は仏になりなん。たとえば灸治のごとし。

とうじ

痛

のち

くすり

当時はいたけれども、後の薬なれば、いたくていたからず。

か

熱

原

ぐち

もの

言

励

墮

彼のあつわらの愚癡の者ども、いいはげましておとすこ

かれ

いち

円

思

き

善

となかれ。彼らには、ただ一えんにおもい切れ。よからん

ふしぎ

悪

いちじよう

思

饑

は不思議、わるからんは一定とおもえ。ひだるしとおもわ

がきどう

寒

はっ

寒

じごく

ば、餓鬼道をおしえよ。さむしといわば、八かん地獄をお

しえよ。恐おそろししといわば、鷹たかにあえるきじ、遭ねこに

鼠あえるねずみを他人とおもうことなかれ。たにん

細これはこまごまとかき候ことは、書かくとしどし月々年

ひびひびもうもうそうらそうら名越あま少輔ぼう能登ぼう

日々に申して候えども、なごえの尼・しよう房・のと房・

さんみぼうさんみぼうそうろうそうろう臆病もの覚欲

三位房なんどのように候、おくびよう、物おぼえず、よく

深深疑疑おおもの塗漆みず

ふかく、うたがい多き者どもは、ぬれるうるしに水をかけ

空空切切そうろうそうろう

そらをきりたるように候ぞ。

さんみぼうさんみぼうだいふしぎことそうら

三位房がことは大不思議の事ども候いしかども、

殿殿原思ちえもの嫉たも

とのばらのおもいには「智慧ある者をそねませ給うか」と

愚癡 ひと 思

もの もう そうら

ぐちの人おもいなんとおもいて、物も申さで候いしが、

腹 黒 だいなん 当

そうらう

はらぐろとなりて大難にもあたりて候ぞ。なかなか、

散 々 もう 助 辺 そうら

さんざんとだにも申せしかば、たすかるへんもや候いなん。

不思議 もう

あまりにふしぎさに申さざりしなり。また、かく申せば、

痴 びと し 亡 おお そうらう もう

かがみ

おこ人どもは「死もうのことを仰せ候」と申すべし。鏡

もう

かれ ひとびと いない 怖

のために申す。またこのことは、彼らの人々も内々はおじ

恐 そうらう 覚 そうらう

おそれ候らんとおぼえ候ぞ。

ひと 騒 兵 士 いちもん

人のさわげばとて、ひようじなんどこの一門にせられば、

書 付 給 そうら きようきようきんげん

これへかきつけてたび候え。恐々謹言。

じゅうがつついたち

十月一日

ひとびとおんちゅう

人々御中

三郎左衛門どの

留

さぶろうざえもん殿のもとにとどめらるべし。

にちれん

日蓮

かおう

花押